
今一番逢いたい君へ

曖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今一番逢いたい君へ

【Nコード】

N1838C

【作者名】

曖

【あらすじ】

高校時代からの友人四人と一ヶ月ぶりに再会。その中には主人公の私の初恋の相手も……。グループ内で結婚している彼と彼女の話を知っているとき、ひょんなことから私の恋愛話することに・

プロローグ（前書き）

60歳を超える男女四人の話です。

ブローグ

どんよりと重苦しい雲が空一面に広がっていて、今にも雨が降りそうな空だった。

でも私はそんなことお構い無しに、庭にテーブルと椅子を出して、座って朝食のパンにジャムを塗って食べた。昔から私は天気に出身の行動を左右されるのが嫌いだった。

子供の頃雨でプールが中止になるのも、雨で遠足が延期になるのも、雨で体育祭が中止になるのも納得できなかった。

でもこんな曇り空は、私の一番の青春時代だった18歳の頃を思い出させるようで嫌いではない。

「そういえばまたあの季節がやってくるな・・・」私は一人空に向かって呟いた。

昼下がりの公園で私は友人を待っていた。

約束の時間より二十分も早く来てしまったので私は時間を惜しんで、まだ読み終えていない小説をしおりの挟みである部分から読み始めた。

読み始めてから間もなくして、二人の友人が姿を現した。彼らは結婚してもう35年も経つのはまだラブラブで、街では人の目など気にもせず手を繋いでいた。

いつだか二人に「何故長く一緒にいてずっと好きでいられるのか」と聞いたことがあった。その時彼らは口を合わせて「好きだから」と答えた。

答えになっていないようにも感じられるが、私には確かにそれがもつともな答えだった。好きだから好きなのだ。愛に理由など必要ない、私は彼らの答えにそう学んだ。

「ごめんね待たせちゃって。まだあの子来てないの？」

彼女の問いに私は何も言わずに頷いた。私は昔から一人の時間が長くなれば長くなるほど口数が減る癖があった。今も読書をしていてどっぷり一人の時間に漬かっていたので口数が少なくなっていた。

「しょうがないなあいつは。いつものことだけど。」

今度は彼の方が口を開いた。相変わらず息の合っている二人だ。いつもこの調子で私は彼らといると孤独を強く感じていた。

遅れること五分。やっとあの子が姿を現した。一ヶ月ぶりに見たあの子は歳の割りにかなりスタイルがよくて、顔立ちも綺麗で、相変わらず私の初恋の子だった。

「ごめんなさい遅れちゃって。」

息を切らしながら謝るあの子に誰一人怒る様子もなかった。私たちにとつてこのやり取りは特別なことではないのだ。

「今日は何処に行くの？」

彼女はそう言つて私の方を向くと、皆私の方を向いた。場所取りや皆をまとめるのは昔から私の役目だった。

「今日は　　って店行こう。この間テレビでやってておいしそうだったから。」

そう言つとあの子が間髪いれずに

「テレビね、定年してだいぶ暇なんだね。昔はテレビなんて全然見なかったのに。」

いたずらに笑うあの子はあの頃と何も変わらなかった。

「うるさい」私は一言であの子をあしらつて、四人で歩き始めた。

周りから見たら少し変な絵に見えたことだろう。六十そこそこのおっさんとおばさんが四人で歩いてるなんて。

見せについて席に着くなり話し始めるのは決まってあの子だった。その内容は大抵自分のことで、車庫に車を入れるのが去年より時間

掛かるようになったとか、電車で高校生の男の子が席を譲ってくれたとか、自分が最近歳を取ったとを感じる時の話だ。

それでももともと口数が少ないうちのグループとしてはだいぶ助かってきた。それに私はあの子の話す話が昔から好きだった。

そんなあの子の話はいつも店員が食事を運んできた時に終わる。どんなに中途半端な形でもあの子の興味が話から食べ物に移って終わる。

それからはいつも昔話に花が咲く。私たちは会えても月に一度なので、今までの40数年の私たちの思い出が語りつくされることはない。

最後には恋愛の話にもつれ込み、彼女と彼の話になる。彼らの話は話せば話すほど新しい事実が発覚してきりがない、それに私たちの老化に伴うボケで同じことを聞いても大抵の場合誰も気付かず、初めて聞いた話と扱われる。

そんな時珍しく私とあの子の恋愛話に白羽の矢が立った。きっかけは彼女の言葉だった

突然「私たちがばかり話してて、あなたたちの聞いたこと無くてずるいわ。」と言って私とあの子に言った。

そう聞いてあの子は即座に「私は恋愛の事は考えたくないわ。離婚してから特に。だから祐史ゆうしが話して。」そう言った。

「私ずっと聞きたかったんだ。なんで祐史が結婚しないのか。」彼女は目を輝かせて、肘杖をしながら私に顔を近づけて言った。

「そういえばそうだな。俺も聞きたい。別にもてない訳ではないし、お金も持つてるし、どうして結婚しないんだ？」

かぶせる様に彼は言った。

「そりゃ・・・」

言いかけたときあの子が入ってきた。

「もしかしてまだあの事引きずってんの？」

図星だった。あの子にだけは話していた私の秘密。

「あの事？知らないわ私。」彼女の言葉に「俺も知らない。」と言

って彼も食いついてきた。

「あれ言っちゃまずかった・・・？」口をふさぐ仕草がやけにわざとらしく、彼女が私に気を使ってくれたことがすぐにわかった。

「いつかは話そうと思ってたんだけど・・・。もう思い出したくないから一回しか話さないからちゃんと聞いててくれ。」

皆は何も言わずに頷いた。私が今真剣であることを感じ取ってくれたのだろう。

「じゃあ話すよ。その事について・・・。」

プロローグ（後書き）

一話目からは主人公の回想に入ります。

記憶の欠片（前書き）

ここからは主人公祐史の回想です。

記憶の欠片

今から43年も前の4月11日。私にとって忘れもしない鮮烈な出来事が起こった。と言うよりもやってきたと言った方が正しいだろうか。その出来事がやって来なかったらいつもと変わらないつまらない始業式になっていたことだろう。

始業式の前のHRで突然先生は一人の女の子を教室に招いた。入って来た子は、綺麗な顔立ちでスタイルが良かったがどこかおどおどしていて、先生にしきりに目で助けを求めているような姿が可愛らしかった。その子を黒板の前の真ん中に立たせると、先生は紹介し始めた。

「えーっと今年から転入してきた胡美咲さんだ。えーっと出身は・・・中国だったよな？」

先生は度忘れしたらしく転入生に確かめた。先生の言葉に何も言葉を発せずただ頷いた。

中国か・・・珍しいな。俺は（この頃はまだ俺と言っていた。）心の中で呟いた。その頃はまだ日中平和友好条約も結ばれておらず、中国との関係が良かったともいえないから。

「そうだ。出身は中国で、日本人とのハーフだ。まだ日本語は片言だけど皆仲良くしてやってくれ。じゃあ胡さんも何か一言」

先生の言葉が聞き取れにくかったのか一瞬戸惑っているように見えたが、一回自分を指差して先生に確かめた後で少し安堵の表情を浮かべ話し始めた。

「えっと・・・これから・・・よろしくおねがい・・・します」

覚えてたであろう日本語を間違えないようにゆっくり言う彼女に俺はどこか親心にも似た「頑張れ」と言った気持ちを抱いた。一言が終わると彼女は行き場をなくしたような顔を浮かべ、また先生に目で助けを求めた。

「じゃあ席は・・・

言いかかった時俺はいつの間にか手を上挙げていた。

「ここ・・・空いてます」

いつもの俺だったら考えられない行動だった。周りからの「おっ！？」とかニヤニヤした顔をこちらに向けられたりする冷やかしに恥ずかしさで顔が赤くなったのを感じた。

それでも多分彼女は日本語がわからないなりに、今の俺の行動がわかったのだろう。彼女が安心した顔を浮かべたのを俺は見逃さなかった。それだけで俺はどこか嬉しかった。

「そうだな。じゃあ胡さんあそこの席に座ってください」

手で先生が指すと彼女は少し足早に俺の隣の席に着いた。カバンを横の取っ手にかけてこちらを向いた。俺も彼女の方を向くと

「ありがとう」

彼女は片言な日本語で言った。初めて見た彼女の笑顔つきで。自然と俺も笑顔になってゆっくりとした口調で滑舌良く「どういたしまして」と言った。

なんなんだろうかこの感覚は？あの頃の私が経験もしたことない感覚だった。でもそれがなんなのか深く自分に問い詰めれば理由など容易にわかり得たはずだった。でもそれがわかってしまうことはあの時の私にとっては「不都合なこと」でしかなかったのだ。

でもこれが私と私の初恋のあの子との紛れもない出会いだった。

その日は始業式ということもあって午前中には皆帰宅となった。俺は彼女に「じゃあね」と言うと「じゃあ・・・ね？」と聞き返されてしまった。

なんと説明していいかわからなかった俺は笑顔を浮かべ手を振ると、彼女も笑顔を浮かべて、なんとなくは理解してくれたみたいで俺に笑顔で手を振り返してくれた。

廊下で俺を待つていた幼馴染の照雄（彼と呼んでいた人物）と君恵（彼女と呼んでいた人物）がその一部始終を見ていたらしく、俺が廊下に出るなり照雄に「誰だよさっきの子は？」とニヤニヤしながら聞かれた。

「転入生だよ」と答えると今度は君恵が「転入生には優しいんだね。彼女が可哀想」と白々しく言われた。深くため息が俺から漏れた。こうなるとこいつらは異常にめんどくさい。部室前に着くまでいくら俺が違うと言っても、延々と二人になじられた。

そこで君恵と別れ、俺と照雄は二人「野球部」の部室の中に入った。それでも俺は照雄になじられ続けた。ここが野球部の悪いところで、長い上に広まるのが早い……。もうどうしようもない。

昼を食べてても、ユニフォームに着替えていても今度は照雄だけでなく、他のやつにまで言われ始めた。「この浮気者！」とか「彼女がかわいそうだ」だとか「手出すの早すぎだ」とか。

それでも俺ら野球部の良いところはグラウンドには私情を持ち込まない所だった……。が最近ではそうもいなくなっていた。

「また見に来てるよ」マネージャーをしている君恵が部室から出てきた俺に真っ先に伝えた。

「またかよ……。」と俺は怪訝そうに彼女の方を見ると彼女と目が合い、目が合った瞬間彼女はこっちに駆け寄ってきた。

学校のマドンナと言われているだけあって顔は確かに端正な顔立ちしてて美人だし、スタイルだって悪くない。でも俺は彼女があまり好きじゃなかった。彼女は俺のことすっごい気に入ってくれてるみたいだったけど。

「祐史くんこれ！練習終わったら食べてね。味見はしてないけど、自信はあるから」

まだ俺は彼女の名前も知らないのに、彼女は俺のことを祐史くんと呼ぶ。差し出された袋の中にはクッキーが沢山入っていた。

「ありがと。じゃあね」

受け取ると、すぐに君恵に渡し俺は走り込みを始めた。嫌われるよ

うに愛想悪く振舞っていたつもりだったが、彼女にはそのクールさが逆にいいんだとか・・・。

気に入られることは別に悪い気はしない。でも俺はそういうのは逆に冷めてしまう性質たちだった。まあそんなこと言ってるから恋の一つもできないんだろうけど・・・。

そんなこと考えながら走っていると後ろから「相変わらずラブラブだね」なんて声が聞こえた。照雄だ。「うるせえ好きでラブラブしてんじゃねえよ。」俺は即座に言い放った。

練習も終盤になり、やっと練習に身が入り始めた。彼女の所為で練習の効率はがた落ちだった。

練習が終わり先生の周りを囲むと、一週間後に抽選会があると知らされた。部長である俺と、副部長の照雄は選択の余地なく行くことになる。

解散になるとさっきのクッキーを皆に食べ与えた。皆おいしいおいしいと言うので俺も一つ食べたが、確かにおいしかった。自信あるっていったしな・・・。でも俺はそんなことあまり気にもせず照雄と君恵と帰り始めた。

もしもあの頃、素直に彼女のことを好きになれていたら私には違う未来が待っていただろう。

暖かい日差しが照り付けていた青春の夏に私は過ちを犯した。

記憶の欠片（後書き）

次回も回想です。

泣きそうになった

それから一週間彼女は当たり前のように練習場に姿を見せた。なんでも付き合ってた人に「好きな人ができた」と告げて別れたとか・・。彼女にとつては彼氏とも別れてまさに背水の陣と言ったところだろう。それでも俺は彼女のことなど気にも留めなかった。

俺がやっと彼女から解放されたのは抽選会の時だった。さすがに野球部でない彼女が抽選会の為に公欠することはできず、抽選会の会場には姿を見せなかった。

それでも照雄は「どうせ帰ったら練習場にいるよ」と冗談にならない冗談を言つて笑った。考えただけでため息が出た。でも彼女の作るクツキーはあれ以来野球部の中では大好評だった。

どうせ待つていてくれるなら胡さんが待つていてくれれば良いのに。と心の中で俺はいつの間にか呟いていた。

あれからの俺たちはほとんど話すことはなかった（正確には話すことができないになる）。それでも目が合えば互いに会釈をして微笑んだ。それだけで俺の心は大いに高鳴った。まるで中学生のように、あの頃の俺と彼女はとも初々しかった。

正直に言えば日に日に俺の中で胡さんという存在は大きくなりつつあった。いつも俺の為に練習前にクツキー渡してくれたり、会えばべたべたしてきて、好き好きと言ってくれる彼女ではなく、まともに話したこともなくて、ただ会釈するだけの関係の胡さんに気が向いてしまうなんて、この世界の神様とやらはなんてひにくれものなのだろう。

抽選会が終わり学校に戻ると、今日は短縮授業だったので部活で残っている生徒以外は皆帰宅していて、やけに静かだった。

駐輪場に自転車を置いて、早く皆に抽選会の結果を教えてやろうと部室に向かつて走っているとき、バス停（うちの学校はバス停が学校の敷地内にあった）の前で不審な動きをしている女子が目に入った。胡さんだ……。俺は彼女だと気付いて走るのを辞めた。

「どうした？」振り向いて俺に尋ねた照雄に「わりい先行ってくれ。後で行くから。」と言って返事も聞かずに俺は胡さんの方に走っていった。

胡さんは俺に気付くと今にも泣き出しそうな顔をしながら、少し笑顔を見せてくれた。

「どうしたの？」

俺はゆつくりとできるだけ聞きやすいように聞いた。

「かえれない」

ただそれだけ言って彼女は我慢しきれずに泣き始めてしまった。

「だいじょうぶ」

俺がそう言うのと「ほんとう？」と言って彼女は俺を見上げた。

そうは言ったものの、彼女が何で、どうやって、どこまで帰るのがわからない俺にはどうしようもなかった。それでも俺は彼女を見捨てることができずに彼女のそばにいた。

「なにでかえるの？」と聞いても、まだその言葉が通じないらしく首を傾げられて、しかも胡さんは一向に泣き止むことは無かった。誰も助けてくれなくて寂しくてそして怖かったのであろう。

「バスでかえるの？」多分わからないと思いながら投げかけた言葉で思わぬ打開策を見つけた。

「バス！」彼女はそう言うって大きく頷いた。そうか英語なら通じるんだ！俺は最近習ったばかりの英語を駆使して彼女とのコミュニケーションを図った。

どこ駅で降りるとか、どこまで行けば大丈夫なんて話をした。それでも彼女の圧倒的な英語力に聞き取れない部分などもあったが、彼女の表情や仕草でなんとなく感じ取った。

そこにやっとバスが来てこれで安心だと思っていると、彼女がふと

俺に英語を言った。その英語は長くて聞き取れなくて彼女の方を向くと、不安そうな顔をしていたので、きつと「バスの乗り方がわからない」と言っただと思ひ、俺はバスに先に乗り込み振り向いて手を差し出して「This way, please」というと、彼女は笑顔で「Thank you」と言つて俺の手を掴んだ。

それから彼女は緊張も少しほぐれたように見えて、いつの間にか涙も止まっていた。それに俺は練習のことなど忘れて、彼女のことを見ていた。

バスに揺られながら俺たちは慣れない英語で、一生懸命言葉を交わした。互いの想いを伝えるように。

時間が過ぎるのがあまりにも早く、俺の中では5分も経たずにこのバスの終車の駅に着いてしまつて、俺たちは顔を見合せて微笑んだ。

降りるのも彼女が苦勞すると思ひ、通じないとわかつてても「おれがはらつておくね。」と言つて二人分のお金を払つた。

彼女が切符を買う所まで付き合つて、改札のところで別れる時

「その電車は二番線だからね。」とわからないといけないので手もピースの形を作つて念を押すと彼女は「だいじょうぶ」と笑顔で言つた。

「そつか」と俺が手を振つて帰ろうとした俺の背中に、彼女が「ありがとう。じゃあね」なんて片言に、でも一生懸命言うから、ちょっとぐつと来た。

俺が学校に戻つた時、もう既に六時を回っていた。

着くなりまた君恵に「あの子今日も来てて、祐史まだ来ないよ。つて言つても「来るまで待つてる」つて言つてずっと待つてくれたんだから少しは話してあげなよ」と言われた。

俺は言われた通り彼女の元に行つて「待つててくれたんだ。ありが

とう」と言った。すると彼女は今まで見た彼女の中で一番嬉しそうな笑顔を浮かべて（悔しいけど確かに可愛かった）「ううん気にしないで。それより今日も作ってきたんだこれ」と言っで多分クッキ―が入っている袋を手渡された。

「ありがとう」と言っで受け取っで、名前ぐらい聞いておこうと思いは「名前なんていうの？」と聞くと、彼女は少し驚いたような顔をして（多分当然のように俺が彼女の名前を知っていると思ったのだらう。）「戸田早苗とださなえっで言うんだ」と笑顔で言った。

「そっかよろしくね戸田さん」そう言っで彼女はまた笑顔で「うんよろしくね祐史君」そう言っで俺は練習に戻った。

これが俺と戸田さんが初めてまともに話した瞬間だった。

次の日、胡さんが学校を休んだ。

ただそれだけが気になっで俺は高校になっで初めて部活を休んだ。

何もやる気が起きなかつたから。照雄は簡単にごまかすことができたが、君恵は俺の異変に気付いていた。

「なんかあるんだったら相談してね。力貸すから」君恵の言葉は少しずれているような気はしたが、正直嬉しかつた。幼馴染っでこともあつて普段は恥ずかしくてそんなこと言えないし、言っでもらえないから。

家に帰っでも脱力感だつりかんは拭えなかつた。これでは俺が明日学校を休んでしまふ。そう思った俺は、少しの間全て忘れるために素振りの練習をした。それでもなんの意味もなく、頭には胡さんがちらついたただ何をするわけじゃなくただ時間だけが過ぎて、一時ごろ明日は胡さんが学校に来て欲しいと強く思いながら俺は遅い眠りについた。

朝俺が教室に入るなり驚きの出来事が起こった。

ドアを開けて入ろうとした俺に胡さんが近づいてきて「おはよう」と言っただから、俺は少し泣きそうになった。

「おはよう」と返すと彼女は通じた喜びからか笑顔がはじけた。

それから胡さんは覚えた日本語を一番最初に俺に聞かせてくれた。どこから覚えたのかわからない方言なんかも言っていた。それに「好き」とも言った。

「それは告白の時に言う言葉」と言つと「告白？」と聞かれたので、必死にない頭を絞りに絞つて「プロポーズ」と言つと、顔を赤くしてはにかんだ。この役目を俺が一生担っていけたら良いなと思った。

あの子を好きになつたのは同情とかそんなんじゃないで、いつの間にか惹かれていたからなんだ。

あの頃楽しい時も、嬉しい時も、辛い時も、悲しい時もただあの子が横にいてくれるだけで私は幸せだった。

好きだった（前書き）

最後の大会のシーンが少し長いです・・・。

好きだった

あの頃の私のあの子への募る想いは確かなもので、それは色々なところで確かに功績を残させた。

大会に全校生徒で行われた中間テストでも、学年五位になってキャリアの中で一番良い成績を残した。

それから野球にも身が入り、やっと始まった最後の大会では主将で、一番遊撃手でスタメンだった。4打数2安打のマルチヒットに2盗塁。守備でも幾つかのピンチを救い、弱小高校のうちの高校は創立以来初めての二回戦進出を果たした。

その後も運と勢いが私たちの高校を後押しして順調に勝ち上がり、私の人生でも初めての決勝へと進出した。

まさかここまで来るとは部員全員思ってもいなかったことで驚いたけれど、その分皆が甲子園を確実に意識することができて、「ここまで来たら甲子園にでたい」全員が思えたことでチームが一つにまとまることができた。

でも前日のたった一つの出来事が私の運命を大きく変えてしまった。どうしても決勝戦を胡さんに見に来てほしかった。そうして俺は胡さんに「明日応援に来てくれない？」と声をかけた。

「良いよ。どこでやってるの？」とあっさりと上達した日本語で答えてくれて、俺は本当に嬉しくてその時は気付かなかったけど、その場面を戸田さんに見られていた。

その日は大会前日と言うことで、軽めの練習で早めに終わったので、部員たちと談笑していると、戸田さんが俺を呼び出した。

「祐史君ちよつと良い？」冷やかされながら送り出された俺を見て初めて戸田さんは小さい声で「ごめんね」と謝った。突然のことに「良いよ気にしないで」と言いながら、この時俺は明らかにいつもと違う様子に気付いていた。

でもその理由が発覚したのはそれから一ヶ月も過ぎてからだった。

もしこの時に理由を知れていたら、私はたった一人で闘っていた彼女をしつかりと受け止めていただろう。そのことが今でも悔やみきれない。

少し歩いて誰もいない教室に着いた。「どうしたの？」と俺が聞くと、少し涙ぐんだような声で「明日勝ったら甲子園でしょ？」と言った。

俺が頷くと「そしたら私には手も届かない存在になっちゃうんだね」と窓の方を見ながら彼女は呟くように言った。俺は笑いながら「そんなことないよ。学校にだってちゃんと今まで通り来るから」と言っただけ、彼女が首を横に振った。

「こんなに頑張っても祐史君は振り向いてくれなかったんだもん。だから私は今日で祐史君の事諦めるよ。ごめんねこんなに付きまとって」彼女は少し無理に作ったような笑顔を浮かべて言った。突然のことに俺が驚いて何も言わずにいると彼女は続け

「でも明日もし負けたら最後に私とデートして。約束だからね」と言った。皆は「頑張って勝ってね」と言ってくれていたのに、一人だけ、たった一人だけ反対のことを言ったのが彼女だった。俺が「負けると思ってる？」と聞くと

「どうだろう？でも祐史君は勝ちに行くと思うわ。それに勝って欲しい」と自分から提案したにも関わらず彼女ははっきりとそう言った。

「なんだそれ」と俺が笑いながら言うと彼女は「自分でもよくわからない」と首を傾げながら笑った。

「約束だからね」そう言っただけで教室を出て行った彼女の後姿は、何か大きい決意をしたように堂々としていた。

多分彼女はそう言えば私がデートしたくなって必死になると思っただけのさだろう。でもそれは私には裏目に出してしまった。

私の中に確実に戸田さんの存在が入り込んできていた。

大会の当日、球場前で会った戸田さんは昨日のことなど忘れたように「頑張つてね」と満面の笑みで言った。そして胡さんは遠くから俺にわかるくらい大きく手を振ってくれた。

この日も俺は一番遊撃手でスタメンだった。

一打席目は相手の投球術に完璧に翻弄されて凡退した。相手高校はここ数十年間、うちの県で甲子園出場を独占している強豪高だった。それでもなんとかピンチを凌いで迎えた5回に俺がヒットを打ったのを口火にこの回で二点を先取して2 - 0とした。

しかし7回にエースが相手の打球を受けてまさかの負傷退場し、代わりの投手が投げることになった。不安が的中し、この回で一点を返され2 - 1となった。

8回の攻撃で俺は四球で出塁すると、監督からの「足でかき回せ」という指示で盗塁を試みたがそれが裏目にでた、捕手の投げた球が俺の脚を直撃したのだ。相手の遊撃手がわざと捕らなかったようにも見えたが、あまりの激痛にそんなことを考える余裕も無かった。ユニフォームをまくると、ボール一個分の青あざが丁度脛の位置にできていた。それでも出たいと言う意志と、仲間の「先輩いなきや勝てないです」と監督の「お前に任せる」という言葉で俺は二塁ベースに戻った。

結局その回は無得点で終わり次の回も凡退し、相手の最後の攻撃に突入した。この回を凌げば俺たちの甲子園出場が決まる。そんな時俺は遊撃手の守備位置に着く時観客席にいる戸田さんを見つけてしまい、小さな迷いが生じた。

このまま俺は勝って良いのだろうか？昨日の彼女が頭をちらついた。それでも無事に1アウトにこじつけたが、1塁・3塁とピンチを迎えた。その二球目打者の打った球は俺の前に転がってきた。勢いはあったが、普通の俺ならゲッツーにできる球だった。

でも俺はその球をトンネルした。さっき球の当たった右足が踏ん張りきれず体勢が崩れて捕ることができなかった。もう指の先まで来

ていた甲子園出場の切符が遠のいていくのを感じた。

3塁ランナーが生還し、俺のことを信頼していた左翼と中翼の間を球が抜けて行き、一塁ランナーも生還した。

俺の最後の大会はサヨナラ二点タイムリーエラーで終わった。泣くこともできず、ただ呆然と座り込んでいる俺に仲間たちが「ドンマイドンマイ」と心底そんなことも思っていないだろう言葉をかけていった。

俺は少し戸田さんの方を見ると、彼女は泣いていた。「負けたらデパートして」と言っていた彼女が泣いていた。

そこで俺はやつと悔しさでやりきれなくて泣きながら拳を地面に叩きつけた。整列をして礼をして、俺の高校最後の夏が終わりを迎えた。

俺の脚の怪我は重度の打撲と診断され、野球で俺に残されたのは右足に残った打撲の青あざだけだった。

それから学校は夏休みに入り、戸田さんとのデートが行われたのはそれから少ししてからだった。一緒に近くで行われていたお祭りに行った。

そこに現れた彼女は浴衣を着ていて、普段の雰囲気とはまるっきり違っていて驚いた。それに俺は彼女を可愛いと思った。

「どう？」と少し身体を動かしながら聞く彼女に、俺は照れ隠しで「いいんじゃない？」と言うと、それでも嬉しそうに笑顔になって「ありがと」と言った。

二時間と短い時間だったけど、二人で屋台の並ぶ道を何往復もして色んな話をして笑いながらすごした。それから公園に行き買ってきた花火をしながら話した。

終わりに二人身を寄せて線香花火をしている時に彼女はこう聞いてきた

「最後の大会で祐史君最後エラーしたじゃない？」俺は小さく頷くと「あれってわざとだったの？」と言った。

「わざとじゃないよ。でも正直に言つと戸田さんのことが頭をよぎった……。これで勝つて良いのかな？つて」俺が正直にそう言うのと「そつか……。じゃあやっぱり私のせいなんだね」と呟いた。

「やつぱり？」つて聞くと「なんか最後祐史君こつち見たような気がしたから。でも嬉しいよ、私の事ちよつとでも考えてくれて」と無理に作った笑顔で彼女は言った。急に彼女が突然すごい不幸に見えて可哀想な気がした。

「これで私は祐史君の事諦めるから、自由に恋してね」彼女の言葉に、彼女は俺が胡さんを好きつてことを知っているんだと気付いた。「でも悔しいな……。私ホントに祐史君の事……。」「少し涙ぐんだ声で言い始めて、突然間を開けて沈黙が流れた。

「でも私ホントに祐史君の事……。」「二回目もそこでつつかえてしまった。「祐史君のことがどうしたの？」デリカシーのかけらも無かった俺はそう急かした。

「ごめんね。やっぱりダメみたい。言わなくてもわかるでしょ？」「と言われ頷くと「良かった」と言つて立ち上がった。多分彼女は「好きだった」といいたかったのだろう。

そこで俺たちは別れた、これが俺たちが交わした最後から7回目の言葉だった。

言葉は人と人を繋げることでできるもので、それによつて想いを伝えることも容易にできる。

でも言葉を失つても、どんなに相手に伝えることが困難になつても伝える事を諦めてはいけない。

諦めなければ必ず相手に届くのだから。

発症

夏休みが明け、俺と胡さんはいつものように隣の席に並んで座った。周りの人も誰一人として変わった様子もなく、前学期からの席に着いていた。

部活を辞めてから俺は急激に胡さんと親しくなった。いつの間にか俺と照雄と君恵のグループに入っていて、長く連れている友達のよくな感覚になっていた。

夏休みの間に彼女の日本語はかなり上達していて、痴話げんかや共通のことで笑いあうこともできるようになっていた。俺は彼女の上達の早さに感心させられているうちに、いつの間にか戸田さんのことは頭の隅に追いやられてしまっていた。

戸田さんとはあのデート依頼会う事はなかった。「諦める」なんて言ってたけど、新学期が始まれば今までどおり俺のことを付きまとうだろうなんて勝手に思っていたけど、彼女は一度も俺の前に姿を現さなかった。

少し寂しくも感じたが、俺は胡さんが好きなんだと自分に言い聞かせて、いつの間にか戸田さんの存在は俺の中で小さいものになりつつあった。

でも新学期が始まって一ヶ月くらいが経ったある日、俺の胸に「戸田さん」という名前が刻み込まれるような出来事が突然、怒涛のようにつながった。

六時間の授業が終わりいつものように照雄のもとを訪れようとした時、桑畑直弥くわはたなおや（戸田さんの元彼氏でバスケット部部长）という人物が俺を訪ねてきた。

「沖原（俺の苗字）いるか？」桑畑は扉近くのヤツにそう聞き、そ

いつが指した人物・・・まあ俺を血相を変えてにらみ、ずかずかと俺の方に風を切るように歩いてきた。

180を超える身長の方が血相を変えてこっちに歩いてきているので、俺もただならぬ気配を感じていた。

桑畑は俺のところにたどり着くなり胸倉を掴み、一発俺の頬をグーで殴った。頬を殴られた時の鈍い音と共に俺は地面にへばりついて、桑畑の方を見た。

「何すんだよ！」俺が言うと桑畑は俺の胸倉を掴み「てめえ早苗の気持ち考えたことあんのかよ！」と間髪いれずに言ったので俺はたじろいだ。

「早苗って・・・戸田さんがどうかしたのかよ」俺の言葉が気に入らなかったらしく、桑畑はまた俺を一発殴った。クラスのヤツは誰も止めに入ろうとせずただ見ていた。

「どうかしたじゃねえよ！早苗の気持ち考えたことあんのかって聞いてんだよ！」と言って俺の胸倉を掴み思いつきゆすった。

「そんなの知らねえよ・・・勝手に好きになって勝手に諦めるとか言つて。こっちが気持ちわかって欲しい位だ」と俺が言うと、桑畑は血管が切れそうなくらい血管をこめかみに浮かべて怒りを露にした。

「早苗の気持ちも知らないで勝手なこと言つてんじゃねえよ！」俺をまた殴ろうとしたとき、ほんのり桑畑の目に涙が浮かんでいることに気付いた。顔を思いつき殴られている事から、俺の口はほんのり血の味がした。

「早苗はなあ・・・早苗は・・・お前のこと本気で好きだったんだよ！諦めたくて諦めたんじゃないよ！そう言つて桑畑は俺のことをがむしやりに殴り始めた、恥ずかしがることもなく涙を思いつき溢れさせながら。

その時誰かが呼びに言ったのであろう体育教官室の先生が桑畑を止めに入った。その時何発も殴られたことによって俺はもう意識が飛んでいた。

目覚めた時俺は病室にいた。俺の隣には桑畑がぐったりとして椅子に座っていた。俺が目覚めたのに気付くと

「さつきは悪かったな。ついカツとなつて・・・」また桑畑は少し涙ぐんだ。

「別に良いけどよ・・・理由教えてくれよ」俺は痛む身体に鞭を打つて、無理に上半身を立ち上げた。桑畑は何も言わずに頷いて、右手の親指と人差し指で目頭を押さえてから笑顔を作つて

「早苗はホントにお前のことが好きだったんだ。それだけは絶対に忘れないでくれ」と言つた。

俺が頷くと「良かった」と言つてまた笑顔をこぼした。

「あいつはお前のこと諦めたくて諦めたんじゃないんだ。仕方なかったんだ・・・」そこで桑畑は我慢しきれずにまた泣いた。

「仕方なかった？」と聞くと「あいつ・・・病気なんだ」と言つた。桑畑の言葉が俺の心にずしりとのしかかった。

あんなに元気だったのに？まさか戸田さんがと思わずにはいられなかった。

「俺と付き合つてゐる頃事故にあつて、その時に早苗は頭部外傷を受けて、その時のレントゲンでは何も異常は見つからなくて後遺症も残らないって診断されたんだ。でも三ヶ月経つたある日早苗が突然「私おかしい」って言つたんだ」そこで桑畑は俺に「ごめん」と言つて涙を拭き鼻をすすつた。

「相手の言っている事が時々わからなつたり、考えてることと違ふこと言つたりするようになったって。それで病院に行つたら早苗は『失語症』って診断されたんだ。」

（失語症は、話すこと・聞くこと、読むこと、書くこと・計算するなどの機能に障害があります）

俺は桑畑の話に真剣に耳を傾けた。

「それで早苗はいっぱい泣いて、毎晩のように泣いてた。失語症はうつ病も合併しやすいんだ。早苗は紛れもなくうつ病も合併している状態で、リハビリもあんまりなくて、俺とも別れるって言ってたんだ。でも俺はそんなあいつを・・・支えたかったから・・・ちよつとわりい・・・」

そう言つて俺に謝る桑畑はとても熱血漢な優しいやつなんだと俺は感じた。

「そんな時お前に出会つたんだ。野球にひたむきに頑張つていて、いつも笑っているお前に早苗は惹かれたんだ。それからお前と話したいとリハビリも頑張つて結構いいとこまで回復してお前と話せるようになった時に早苗が俺に真剣に別れようつていったんだ。今まではいつも恋されてきたから、最後の恋は自分からアタックしたんだつて・・・。時間がなくてあいつ焦つてて無茶してたのかもしれない。野球部の最後の大会の二日前にあいつ悪化してるつて言われて入院を勧められたんだ。それから俺のところに来て一晩中泣いて、あいつが・・・お前のこと諦めるつて言つたんだ。お前には迷惑かけたくないからつて・・・。」

話し終えると桑畑は堪えてきた涙を一気に流し、声を上げて泣いた。ホントに彼女のことが好きなんだ・・・。

「そうだった・・・気付けなくてホントにごめん・・・」俺も今までしてきた自分の態度を振り返り、なんて酷いことしたんだという罪悪の念に囚われ、涙を流さずには入られなかった。

それでも桑畑の話がここで終わつたと言うことは、戸田さんは最後のデートのことを桑畑には話さなかったのだらう。あの時彼女が俺に伝えることができなかった「好き」という言葉は、もう彼女の頭の中のメモリーには残っていない。そうわかつていたならもつと彼女の言葉に耳を傾けたのに・・・もう何を悔やんでも遅かった。

俺は彼女と話したくて、話したくて、頭よりも先に口が動いていた。「戸田さんの病室に連れてつてくれないか？」

私の求めていた愛はここにあったんだと、何かを失ってからじゃないと気付けない私は
とんでもないばか者で、最後の愛のカウントダウンはすでに始まっていた

発症（後書き）

失語症について間違いがありましたら指摘お願いします。

独り善がりな想い（前書き）

失語症を発病した戸田さんと、日本語が上達していく胡さんの間に挟まれて苦しむ主人公祐史。

独り善がりな想い

桑畑に連れられて訪れた戸田さんの病室の前で、俺は改めて桑畑に確認された。

「会ったらショックを受けるかもしれない。それでも入るか？」桑畑の言葉、それでも俺の心に迷いはなかった。

「それでも俺は彼女に会いたい」そう伝えると、桑畑は少し涙ぐみながら

「そうか・・・早苗も幸せだな。最後に恋したのがお前で。ここからは一人で行ってやってくれ。俺はもう早苗とは会えない。最後まで支えてやれなかったことを謝っておいてくれ」桑畑の言葉にはやけに重みがあつて、どこか説得力もあつた。たぶんそれはこの世で一番彼女を愛していた男の言葉だったからだろう・・・。

一人になり、いざ自分の手を彼女のドアノブにかけたとき、自分の手が震えている事に初めて気付いた。このドアを開いてしまったらもう後には戻れない。そんな重い責任が俺にのしかかってきてるのだろう。

それでも俺は勇気を出してドアを二度ノックし沈黙の中、少しずつ、少しずつ自分のショックが小さくなるようにドアを開けた。

多分彼女は桑畑が来たのだと思つたのだろう。俺を見た瞬間驚きの表情を浮かべ、その後全てを悟つたような表情を浮かべたような気がした。

「こんにちは・・・戸田さん。久しぶりだね。」

俺の言葉に彼女は、最後にデートをした時と変わらない屈託のない笑顔を浮かべて、何も言わずに頷いた。

それから俺は独り言のように沢山のことを一人で喋つた。全ての話に戸田さんは笑顔で頷いてくれていたけど、もう彼女に俺の言葉は伝わっていないだろう。

最近では面会は桑畑と家族以外は拒否していて、病院の先生でも極

力他人に会うことを嫌がっていて、リハビリもろくに行っていないらしかった。

そんなことを思っているといつの間にか俺の頬を涙が伝っていた。あんなに話すのが嫌だったのに・・・あんなに戸田さんを避けていたのに・・・もう好きと言ってもらえないんだと思うと悲しくていたたまれない気持ちがあふれ出したのだ。

俺の涙に気付いたのか気付いてないのか、戸田さんは端整な顔でただこちらを見上げていた。

その時戸田さんの母親が病室の中に入ってきた。母親は俺を見ると「早苗は男にもてるんだね」ボーイフレンドが二人もいるなんて」と冗談を言った。

戸田さんの母親と入れ替わるように俺は「明日また来るから」と言っ

て病室を後にした。

帰る間際に病室の外で戸田さんの母親と話すと、戸田さんは失語症の中でも「全失語」に当たるらしく、全くと言って良いほど話すことができないということだった。

「だから無愛想だけど許してね」という言葉に「笑顔で頷いてくれてました」というと、とても驚いたような表情を浮かべて

「あんだ相当気に入られてるんだね。早苗が笑顔見せるなんて最近じゃ考えられなかったよ・・・。桑畑君にも笑顔見せなかったのに」と少し俯いていった。

それと桑畑のことを話すと「そっか・・・今までありがとねって伝えといてくれる?」と言われ、「わかりました」と言っ

て俺たちは別れた。

あの頃はまだインターネットなんて普及していなくて、病気のことを調べるには分厚い本を片っ端から読んでいくしかなかった。

それでもまだ失語症に関して載っている事は少なく、私はただもど

かしくて行き場の無い苛立ちを覚えるだけだった。

第一人者と言われる人にだって会いに行った。でも「治らない」といわれるのが怖くて、ともに聞くことすらできなかった。

その頃の俺は、いつの間にかあんなに好きだった胡さんを遠ざけていた。彼女を見ていると胸が苦しくなった。目の前で日本語がどんどん上達していく胡さんと、もう滅多に言葉を発しなくなった戸田さんを比べてしまうから・・・。

一回胡さんに本気で怒ったこともあった。彼女は俺が冷たい態度を取ると、わざとイントネーションをおかしく言ってみたりする癖があった。その日も同じで彼女がイントネーションをおかしく言った時俺は我慢の限界が来た。

「ちゃんと話せるやつがなんでちゃんと話さないんだよ！」突然怒鳴った俺に胡さんと照雄と君恵は大いに驚いていた。

ごめんとも言えずに気まずい空気にいにくくなって教室を飛び出すと、後を照雄が追いかけてきた。

「どうしたんだよ？最近祐史おかしいぞ」本気で心配してくれているとわかっていても俺は「そんなことねえよ」と言っただけであしらってしまった。

今思えばちゃんと照雄や君恵にこのことを相談しておくべきだったと思う。でも一人よがりだったあの頃の私は、全てを一人で背負い込んで、治る見込みのない彼女を必死に看病して、周りから見たら惨めに見えたかもしれない。それでもそれしかあの頃の私にはできなかったんだ。結局それが二人を傷つけることになるなんて知りもしないで・・・。

あの日から俺は毎日戸田さんの病室を訪れていた。毎日彼女は屈託のない笑顔を俺に向けてくれた。言葉にできない想いを必死に表現してくれているようで、彼女が物凄く愛しく感じた。それだけで俺は嬉しかった。

俺が毎日お見舞いするようになってから二ヶ月ちよつとが経ったある日、いつものように病室に入り、彼女の目をしっかりと見てゆっ

くりとした口調で「こんにちは」と言うとかすかに彼女の口が動いたように見えた。

静かにして、彼女の口元に耳を近づけると、声にならないような小さい声で「こ・・・こ・・・、こんにちは」と言った。伝わった？と聞くように首を傾げる彼女に俺は大げさに頷くと、安心したようにいつもの笑顔を浮かべた。

またちよつと前のように「好き」と言ってもらえるんじゃないかって期待から、驚きよりも嬉しさのほうが大きくて涙が止まらなかった。

後で戸田さんの母親に聞いたのだけど、俺が初めて病室を訪れた次の日から、率先してリハビリを始めていたらしい。

「言ってくればよかったのに」というと「そしたらつまらないじゃない」と言った。その口調はどこか懐かしい気がした。戸田さんの話し方に似ていたからかな？思い出すとまた涙が出てきていた。またいつか戸田さんと話せる機会が来るんじゃないかと、自然と疑うこともなく信じていた。

怒鳴り散らして以来あの三人とは距離ができていた。そんなある日胡さんに帰り際に引き止められて「話があるからちよつと来て」と、いつになく真剣な顔で言われた。

受験で皆帰宅が早く、誰もいなくなった教室に俺は胡さんと二人つきりになった。いつもは照雄と君恵がいて四人で話していたから、二人きりで話すのは久しぶりで少し緊張した。

胡さんはなかなか話を切り出さずに、窓の方を見ていて俺に背中を向けたままだった。一分二分と沈黙の時間が流れ、胡さんは何回か深呼吸をして話し始めた。

「なんか久しぶりだね。ちよんとかうやって話すの」少し目に涙を浮かべて、今にも泣き出しそうな顔に無理矢理笑顔をつけたような

顔で振り返った。

「そうだな」俺が淡白に答えると間髪いれずに「祐史君最近私のこと避けてるでしょ？私の事嫌いになった？」と一気に言って、胡さんは我慢しきれずに涙を流していた。

こういう状況になると俺は弱かった。一生懸命戸田さんを好きになろうとしていても、やっぱり心の中では胡さんの存在が消えることはなかったから。

「そんなことないよ」と言うと、もうかすれたような声で「避けるよ・・・私が3ヶ月間どんな思いで過ごしてたかわかる？祐史君ともっと仲良くなりたいのに、嫌われたくなかったのに・・・苦しくて苦しくてどうしたら良いかわかんなくて」告白まがいなことを言われ、目の前で泣き崩れる胡さんに俺は何を言って良いのかわからなくなった。

少し経つと泣き止み「ごめんね。気にしないでね」なんて言われたけど、こんなこと言われて気にしない男などこの世にいるのだろうか？と思った。

しばらく経って君恵から聞いた話だと、この時胡さんは他の男から告白を受けていたという。でも初めて付き合う人は祐史が良いと言っていたんだとか。でも結局胡さんはそいつと付き合い始めた。もし俺がこの時ちゃんと彼女と向き合っていたなら傷つく彼女を見なくてすんだのだろうか？

あなたにいつでも言えると思っていた言葉が言えぬうちに、いつの間にかあなたは遠くに行ってしまったって、私はその言葉を心の中に「後悔」と一緒にしまいこんだ。

今あなたの横に愛しい人がいるのなら恥ずかしがらずに伝えて欲しい、「好き」という言葉を。

愛の形

ここで改めて失語症について書かせて欲しい。

脳卒中や頭部外傷の時に、脳の冒された場所や大きさによって、半身麻痺や言語障害という後遺症が残る場合がある。失語症は左脳の言語領域が冒された時発症する。

失語症は、話すこと・聞くこと、読むこと、書くこと・計算するなどの機能に障害があり（戸田さんの場合全失語なのでこのほぼ全てに障害がある）よく言われるのは「日本人がフランスのパリに一人で旅行したような状態」と似ていると言うこと。フランス語は、聞こえていても意味は分からず、話もできない、これによく似た状態。そしてリハビリの施設の少なさもある。今現在の日本でも数多くはないので、通院が無理な患者が多くてその場合在宅になるが、リハビリが不十分で孤独感に陥りやすい。そして復職も厳しい。

そしてこの病気は治ることなく、リハビリを何年も重ねて本当に少しずつ良くなっていくということ。それを医師に聞かされたとき私は絶望の淵にいた。それでも私の唯一の救いは失語症で死ぬことはないと言うことだった。

戸田さんは若いこともあってリハビリも人よりも順調に行われていて、戸田さんの母親も医師も明るく振舞っていたから、私もその気になりいつかまた話せるとこの病気を軽視してしまっていた。

クリスマスイブ、街にはいつもとは違うロマンチックな雰囲気が漂っている。街行く人もどこか幸せそうな顔をしていて、これからどこか高級レストランに恋人と食べにでも行くのだろう。

そんな中俺はいつものように病室へと向う。花束なんて抱えながら戸田早苗と書いてある病室のドアの前で少し深呼吸する。花束をあ

げるなんて初めてだったから緊張した。プロポーズする時はもっと緊張するんだろうなと思うとゾツとして俺には無理だと感じてなぜか笑えてくる。

自然な笑顔でドアをノックし開くといつものように彼女が目の前ベッドにいた。

「こんにちは」と言う彼女が母親が会釈し彼女も「こんにちわ」とまだゆっくりだけどこの間より随分と上達した挨拶をした。続けて彼女は首をかしげて俺の後ろに隠してあるものを覗く仕草をした。彼女の母親がいるということと少し照れはあったけど、彼女に花束を手渡し、驚きと嬉しさが混じったような表情を浮かべる彼女の目をしっかりと見つめて

「戸田さん、メリークリスマス」とゆっくりとちゃんと届くように言うと、彼女は伝わったのかいつもの屈託のない笑顔ではなく、恥ずかしそうに控えめにでも嬉しそうな笑顔を浮かべ、喜んだくれたように見えた。

一瞬彼女と母親がアイコンタクトしたように見えると、彼女の母親は「花瓶の水を入れ替えてくるわ」と言いながら彼女に頑張つてと言う様になつこりと微笑みながら席を外した。その一瞬に彼女と彼女の母親の絆というか信頼感が伺えたような気がした。

彼女の母親が席を外した後、彼女がゆっくり口を開いた。か細い彼女の声を全て聞きたくて俺は彼女の口元に耳を傾ける。

緊張してなかなか上手く言葉にできない彼女に「ゆっくりで良いよ」と言った。もし一日掛かったって一週間掛かったって俺はその言葉を待っていたかったから。

ゆっくりゆっくりと言葉を繋げていく彼女。「きょうは・・・とださん・・・じゃなくて

私の目をじつと見つめて言う彼女に「大丈夫。ちゃんと聞いているから」と笑顔で言うと彼女も少し笑顔を見せてくれた。

「きょうは・・・きょうだけで・・・いいから・・・さなえて・・・いつて？」結局この言葉を言うのに彼女は三時間を要した。きつ

と俺にはわからないところで必死にリハビリに時間をかけて今日に間に合わせたのだろう。

彼女の首を傾げる仕草を愛しいと思いながら「今日だけ？ずっと呼ばせてよ」と言いながら彼女を抱きしめた。

抱きしめた俺の耳元で「いつて？」と言われたので、「早苗」と呼ぶと彼女は涙を溢れさせながら俺の唇に唇を重ねてきた。少し驚いたけど彼女に応えるように二度目は俺の方からキスをした。病室の中にもいつの間にかクリスマススムードが広がってほんわかとしたロマンチックな雰囲気が漂い始めた。

三時間も花瓶の水を替えに行っていた彼女の母親を探そうと病室を出ると、病室のすぐ前で泣いていた。いつも明るかった人が涙を流していて俺は少し動揺した。

俺に気付くと涙を拭いて笑顔を見せて「これからも娘をよろしくお願いします」と改まって頭を下げた。「こちらこそよろしくお願いします」というとよっぽど嬉しかったのだろう。涙を堪えきれずにまた流して「ありがとね」と言った。

病院を出た後少しブラブラしていて、行き着いた公園で缶コーヒーを飲みながらベンチに座った。人気のない公園なのか冬だから人がいないのかわからないけど広い公園の中俺一人だけがポツリといるだけだった。

太陽の光が気持ちよくてその光りで常に持ち歩いている本を鞆から取り出ししおりの挟まれた部分から読み始めた。

主人公はどこにでもいる大学生。ある日天真爛漫な子と出会い、主人公はその子に惹かれ始める。いつでも明るくて、ムードメーカーで元気彼女。

それでも人に言えない悩みを抱えていた。彼女は病気だった。いつ発症してもおかしくはない病気。もし発症したら助かる見込みは限

りなく0%に近い。それでも主人公は弱っていく彼女を必死に支え続けた・・・

物語はまだ続くけど俺はそこで読むのを辞めた。日が暮れてしまうから・・・いやきつと結末を想像して読みたくなかったからの方が正しいだろう。

「病気の女の子」という点で少し早苗とダブらせて読んでいた分「死」に直面することから逃げた。読んでしまったら早苗までも死んでしまうような気がしたから・・・

そんなことを考えているといつの間にか涙が溢れてきた。早苗がいなくなるなんて考えたくもなかった。最初は偽りの愛だったのに、いつの間にか俺は本気で早苗を愛していた。

涙を拭き鞆に本をしまっている時に声が聞こえた。「祐史君？」声の方を向くとそこには胡さんがいた。

「久しぶり」と言いながら近づいてきて「隣いい？」と聞かれ「いよ」と答えると、帰ろうとしていた俺の隣に腰を降ろす時

「よいしょ」と言いながら座る彼女に思わず笑うと「なんか変？」

と聞かれ「よいしょなんて誰に教わったの？」と聞くと「君恵がそうした方が可愛いよって言ったの」と答え「君恵も変な事教えるね。でも可愛いかも」と言って笑うと「もう」と笑顔で彼女は言う。二人の間に懐かしい雰囲気が一気に立ち込める。

「なんか祐史君が笑ってるの久しぶりに見た気がする」彼女の言葉に俺は思いをめぐらせる。自分ではいつも通りやっていたつもりだったのに、胡さんにはそう思われていたのだろう。

彼女は続ける「祐史君はクリスマスに一人で何やってたの？」なんか嫌味な言い方だったけど俺は珍しく腹が立たなかった。でも「散歩かな」と言う「おじさんだね」と笑われたのはさすがにちょっと腹が立つたけど。

「祐史君は大学行くの？」この問いをはぐらかすように「胡さんは彼氏と同じ大学行くの？」と言うと少し顔を赤らめながら「うん」と短く答えた。

そっか上手く行ってるんだとちよつとがっかりする自分に俺はがっかりしてごまかすように遠くを見た。今ならちゃんと応援できる気がしてたのに・・・。

「祐史君は？」とまた切り返されもう逃げ場もなく「行くよ」と言うのと「どこら辺の大学？」と少し追求され「知ってどうするの？」と冷たく言うのと「大学行っても君恵と照雄君と祐史君とは仲良くしてたいから」と照れ笑いを浮かべた彼女「俺も仲良くしたいけど多分あんまり会えないよ」と言う少し残念がりながら「何で？遠くに行っちゃうの？」と言った

「そんなことないけど、勉強しようと思って」と言うのと「祐史君らしくないね。なんかあった」と笑いながら言う彼女に俺は真剣に「ちよつとね・・・治したい病気があって」と答えた。人に初めて言ったこの言葉に嘘なんか一つもなく、俺は真剣に「失語症」に向き合う決心をしていた。

胡さんと別れる時「勉強頑張つてね」と手を振った彼女は紛れもなく俺の少し遅めの初恋の人だった。彼女はこれから彼氏に会いに行くのだろう。

俺はこの時そつと胸の中の胡さんへの想いをギュツと握り潰したつもりでいたのに・・・

二人

冬休みの間俺は一日のほとんどの時間を彼女の病室で過ごした。今考えると口下手な私がよくあんなにも話すことがあったなと感心してしまうほどだ。

クリスマス以来俺と早苗の関係は急速に近づき、母親公認の関係と言うことで病室の中では臆することもなく堂々と手を繋ぎあっていた。

リハビリの方も順調に進んでいて、医師も今までこんなに早いペースで回復をしていく患者は見たことないと舌を巻くほどで、それに加えて「祐史君が来てから急にだよ」と言われると照れながらも少し鼻が高い気分だった。

でも冬休みの終わる三日前医師から思いもしなかったことを告げられ愕然とさせられた。

「そろそろ娘さんには退院してもらうことになると思います」こいつは何を言ってるんだと俺と早苗の母は顔を見合わせた。まだ早苗は完治などしてもおらず、普段の生活に支障がないところまで回復しているとも思えない。

納得のいかない俺たちに医師は話を続ける。

今のように自殺も多くなり精神的な病気を軽視する傾向の強かったバブル崩壊前の日本では、結局死ぬことのない病気である早苗のような人物に一個の病室を長々と貸すのはありえないことで、それならガンや白血病などの治らないとされていた病気の方を入院させて集中して見られる環境を作るという考え方が主流だった。

その世の中の流れから早苗が病院を退院という形で追い出されるのは仕方ないことだったし、現に早苗のリハビリを行う施設に来ている患者のほとんどは退院して自宅静養していた。

退院してもリハビリは通院すればできるけれど、早苗の家からこの施設まで通うとなると毎日など通えるはずもなく、月に何度かし

か通えず今よりも明らかにリハビリの効率は落ちるだろう。

今せつかく早苗のリハビリは実績を上げ始めて軌道に乗ったというのに……。落ち込む俺の隣で早苗の母は落ち込んだり、わめいたりせずに至って冷静さを保っていた。

医師との話を終え病室に戻ると何も知らない早苗がいつもの笑顔で俺たちを迎えた。もしかしたらこの笑顔はいつか失われてしまうかもしれない。そんなことが頭をよぎる

早苗の母は医師に言われたことは何も言わずに「花瓶の水をかえてくるね」と言って花瓶を持って少し足早に、早苗の顔もあまり見ないで病室を出て行った。

その素っ気なさ過ぎると思える程の態度に、早苗は少し違和感を感じて心配そうな表情を浮かべた。こんなママ見たことないという感じに

しばらくして早苗と別れを交わし、未だ病室に戻らない早苗の母に挨拶しようと探していると、早苗の母は水道のところで座り込み泣いていた。

早苗はもう医師に見捨てられたのかもしれない。その不安が俺と変わらずに早苗の母にもあったのだろう。どんなに冷静を装っていても、病室に帰ってきたときの早苗の笑顔を見たら我慢しきれなくなつたんだと思う。

俺は結局早苗の母に挨拶することなく病院を後にした。

冬休みが明け例年通りに三学期が始まった。ただ高校最後の学期ということもあり、周り少し浮かれていたり、そわそわしていたけど俺はいつも通りの何も変わらない生活を送っていた。

廊下を歩いていると久々に見た君恵と照雄の姿があり、二人はいつになく仲良さ気で、俺が言うのも変なのだが見ない間にどこか垢抜けたような気がした。俺に気付くと二人は笑顔になり近づいてくる。

「私たち付き合うことになったの」君恵がそう言つと二人はお互いの想いを確かめ合うように見つめ合った。それを見ていると、昔一度照雄が俺に「君恵のことが好きなんだ」と打ち明けた時のことを思い出した。

あの後結局告白もせず、照雄は何事もなかったかのように過ごしていたので俺はすっかり忘れてしまっていたけど、照雄は小六の時俺に打ち明けてから、いやそれよりずっと前から君恵のことを想い続けていたのだらう。

その想いを遂に高三の冬休みに君恵に告げることができ、晴れてその結果を今六年越しに俺に報告する幼馴染で親友の照雄は見たこともないくらい幸せそうな顔をしていて、俺は心から素直に「おめでとう」と言えた。

それから七年後の二十五歳の時二人は結婚した。照雄は小六から想っていた君恵との初恋を実らせ、今現在の六十歳に至るまで他の女性には目もくれず君恵一筋を貫いてきた。そんな高尚な照雄の恋愛に自分の恋愛を重ね、私はいつしか羨ましく思い憧れまでも感じていた。私には一生手の届くことのない、綺麗な恋愛の形だと思えたから。

遂に俺が恐れていたこの日が来てしまった。

早苗の母から電話をもらい、俺は受験勉強なんか放り出してすぐに病院へと駆けつけた。俺が駆けつけたときにはもう既に病室は片付いていて、綺麗になったベッドだけが真ん中にポツリと在りどこか俺の胸を苦しめた。

きっと早苗は俺も早苗の母もいないときはここに一人で何をする訳でもなく、ただじっとして俺たちが来るのを待っていたんだと思うと悲しく感じ、退院させるのも一概に間違いとはいえないかもしれないと思えた。

病室に戻ってきた早苗と早苗の母は俺を見ると笑顔で「こんにちは」と言っただけ、二人ともいつもの笑顔とは違って少し憂いを秘めたような笑顔だった。きつと怖いのだろう。恐れているのだろう。私は、早苗は外の世界で生きていけるのかと。

二人は既にお礼参りを済ませていて、俺にできるのはせいぜい早苗の荷物を車につめるのを手伝うことくらいだった。

看護婦や医師に見送られ車に乗り込む早苗の顔つきはいつもと違ってどこか強張っていた。そんな表情を見ているともう後戻りはしちやいけないんだと、俺はずっとこの子を支え続けなければいけないんだと感じた。桑畑のことが頭をよぎる。

最近桑畑を思い出すことが多くなった。学校で何回か見かけたけど何を話していいかわからず、一言も口を交わさなかった。

早苗を見ていると、こんな時あいつならなんて声をかけるのだろう？とか、こんな時あいつならどうするだろう？って思ってしまう。

俺の視線に気付くと早苗はこちらを向いて恥ずかしそうに笑った。初めて見た早苗のどこか周りの家とは雰囲気の違い、そして家もとても大きく、きつとどこかの大きな会社の社長なのだろうと思った。久々に見た自分の家に早苗はいつになく感激したような表情を浮かべ、真っ先に玄関に向いドアを開け中に入って行った。

「全くあの子は落ち着きがないね」なんて笑って言う早苗の母もどこか嬉しそうで、さっきの不安など忘れてしまったみたいだった。荷物を持って早苗の後を追うようにドアを開け中に入ると早苗がまだ玄関にいた。

「どうしたの？」と言いながら早苗を追い越し荷物を床に置こうとしている早苗の母確認しながら、俺が早苗に合図すると、緊張したように深呼吸して、母の背中に

「ただいま」と言った。早苗はまたもう一度言った「ただいま」と。言いながら彼女は泣いていた。やっと戻ってこれたんだと実感して、安心したのかもしれない。

そんな娘を早苗の母は抱きしめながら俺に悔しそうにでも笑みを見

せ、俺も笑顔を浮かべると視線を戻し、早苗の母は早苗に「お帰り」と言った。これは俺が医師に退院をほのめかされた日から早苗と、早苗の母には内緒でリハビリに励んだ結果だった。

そんな二人を見ていると、そこら辺のどこか安っぽいホームドラマなんかより感動して心にしみこんだ。邪魔をしちゃいけないと思い、俺は「明日また来ます」と言っただけで早苗の家を後にした。

これから二人を迎えるのは過酷な未来かもしれないけど、この二人なら乗り越えていけるような気がした。この時は……。

次の日学校に行き、もう卒業の決まっていた俺は嫌いだっただけの授業をサボり先生の来ない肌寒い屋上で寝転んでいて、普段誰もない屋上に珍しく誰かやってきた。

目をやると足だけが見えて、スカートだったのですぐに女子だとわかった。

「祐史君授業サボっちゃいけないんだよ」その声は胡さんだった。

「胡さんもサボってるじゃん」俺が見上げて言うと彼女は悪戯に笑って俺のすぐ横にしゃがみこんだ。

「いつもココでさぼってるの？」

「まあ大抵は。先生に絶対見つからないし」

「ふん。じゃあ今度から私もココ使っていい？」彼女はこっちを見て笑顔を浮かべた。何を考えてそんなこと言ってるのかは全然わからなかったけど、いつの間にか「いいよ」と言っている俺がいた。少し二人の間を沈黙が流れたけど、もうそこに昔みたいな気まずさはなくなっていた。そんなことに寂しさを感じながら胡さんを見ると、彼女はただじつと校庭の方を見ていた。

彼女の恋したことがもう何十年も昔のように感じる。俺の視線に気付いた胡さんは、こちらを向き俺に首をかしげながら微笑みかけた。

少し経って彼女が口を開く

「そういえばさ・・・昨日祐史君病院にいなかった？」思いも寄らない彼女の言葉に俺はドキツとした。

「なんで？」俺の言葉に彼女は少し慌てながら手を横に振って「あ、あのね。昨日ちよつとお母さんのお見舞いに行つて、そしたら丁度戸田さんが病院から出てきて、そのときに祐史君っぽい人がいたからさ・・・」と言い俺を見た。

彼女の言葉に俺は見られていたんだと感じ、何かが俺の中で崩れていくのを感じた。

私の心が揺らげば揺らぐほど二人を傷つけていくなんて気付けないほど、あの頃の私はまだとても若かったんだ・・・。

揺れ動く心

「昨日祐史君病院にいた？」そう言う胡さんにいつもの元気はない。わからない・・・何を考えているのだろうか？ここで正直に答えたら嫌われてしまうのだろうか？

一瞬正直に答えることを躊躇う自分がいた。それを振り払い、様子を伺いながら「うん」と言うと、彼女は力なく「そう」と言って悲しそうな顔をしたのを俺は見逃さなかった。

話し終わり俺の近くから離れていく胡さんの後姿はなんだか寂しそうだった。

早苗の家に向かう途中、色々な不安が俺の頭を交錯した。

胡さんは俺のことをどう思ったのだろうか？早苗のことを昔は散々嫌っていたのに、結局男なんてこんなもんで、祐史君もその程度だったんだ。と幻滅しただろうか？

正直な話、今自分が何故早苗のことではなく胡さんのことを考えているのか、自分でも良くわからなかった。もう彼女への想いは断ち切ったと思ってたのに・・・。

自分の気持ちに向き合うのが怖い……。いつの間にかたどり着いていた早苗の家のインターフォンの前で立ち尽くす俺に、見知らぬ男が声を掛けてきた

「何をしてるんだ君？」怒っている訳でもなく、ただ声を掛けられただけだったが、俺はいきなりのことに気が動転してしまった。そんな俺にその男は続けた。

「もしかして・・・君が祐史君かい？」俺の名前を知っている事に驚き見上げると、はじめて見たその男の顔はとても優しく、顔をくしゃくしゃにしながら微笑んでいたので、少し安心して「はい」

と答えると

「そうかそうか。中で早苗が待っているから。早く入りなさい」と俺を中に手招いた。この人は一体誰なのだろう？お父さんにしては歳が離れすぎているし・・・おじいちゃんだろうか？

早苗の家に入るのは二度目だったけど、なんか懐かしい感じがした。玄関の靴箱の上にお香を焚いてあるのが目に入った。そっか匂いだ。俺はすぐにぴんと来た。

婆ちゃんの家と同じ匂いがするんだ。うちの婆ちゃん家は裕福な訳ではなかったけど、変なものに凝っていた。そして婆ちゃんの頑固な性格のせいで凝っているものは徹底的に集めてしまう癖があったから、きつと同じお香を持っていたのだろう。

早苗の部屋に案内され入ると早苗は笑顔を作って「こんにちは」と言った。もうすでに入院した当初のぎこちなさはなくなっていた。それが俺に改めて月日がたっていることを認識させた。

それに答えるように「こんにちは」と言ったが、俺は彼女の部屋に流れている音楽に気が取られていた。

今俺が「この音楽好きなの？」と言ったら彼女は答えられるだろうか？もしかしたら首を傾げられるかもしれない。今確かに俺の心は揺らいでいた・・・

音楽を流しているラジカセの前で立ち尽くす俺に、早苗は後ろから「どうしたの？」と問いかけた。

彼女の方を向きなおして早苗の顔を見ると、いまどきの女子高生と何一つ変わらない普通の女の子、いやそれより可愛い女の子の顔をしていて、彼女は今俺の抱いている不安に気付いているのだろうか？そんなことを考えながら「ちよつとね」と言うと、彼女は不満そうな顔を浮かべた。ごまかされたと感じたのだろう。

ラジカセから流れる歌に耳を傾けながら、俺は彼女の機嫌を直すために、彼女の隣に腰を掛けた。でも何を話して良いのかわからず、

二人の間に沈黙が長い間流れていた。

タイミングよくさっきのおじいさんが飲み物を持って部屋に入ってきた。

「これでも飲んで、ゆっくりしていきなさい」そう言っただけな笑みをこちらに向けたおじいさんに会釈すると、早苗が「お父さん」と言っただけをシッシとやった。

そのおじいさんは「はいはい」と言いながら部屋から出たのを見て「お父さんなの？」と聞くと彼女は何も言わずに頷いた。

その後早苗は小声で「でも・・・」と何かを言おうとしてやめた。でも今はそれを聞いちゃいけないような気がして、俺は聞こえない振りをした。

この日一つの大きな収穫があった。俺が部屋に入ったときから早苗が右手に持っている紙のことを尋ねると、それは今流れている曲の歌詞カードだった。

「わかるの」と言っただけ歌詞カードをプラプラとさせる早苗を見て、書いてある字はわかるかと言いたいのだと俺はすぐにわかった。

じゃあと思いきや早苗が俺がこの部屋に来て一番最初に聞いたかった事を紙に書いて、早苗の前に差し出すと、何も言わずに頷いたけど満面の笑みで本当に好きなんだとわかった。

俺たちは早苗の両親にばれないように玄関でキスをして別れ、俺はその足である場所へと向かった。

店内を探し回り、十五分もかかってやっとお目当てのものを見つけた。俺は少し浮かれた気分になりながら帰路に着いた。

その頃もう俺の頭の目には早苗の姿しか写らなくなっていた。

家に着くとテーブルに並べられた夕飯よりも、お風呂に入るよりも先に俺はさっき買ったものの袋を開けてラジカセに入れた。

流れてくるものは早苗の部屋で流れていたものと同じで、いつもとは違う雰囲気俺の部屋を覆った。

それからしばらく私の部屋ではいつでもこの歌が流れていた。今でも押入れの隅に大事に取ってある・・・青春時代のよき思い出として。

たった一つのあなたの強がり、私の心をいつまでも締め付けている。

揺れ動く心（後書き）

更新がだいぶ遅くなってしまい申し訳ありません。

TRUE

家の郵便受けに一通、俺宛の封筒が投入された。今日は丁度一週間前に受けた大学入試の結果発表だった。

俺は学校にも遅れていくと連絡し、万全の状態の結果発表の封筒を待っていた。

誰もいないリビングのテーブルの上に一度封筒を置いた。今のように推薦なんてなかったこの時代、もしこれで不合格なら浪人して来年挑戦するしか俺には残されていなかった。

それ以外にも他の大学という手段もあったけど、余り物大学なんて行く気は俺にはさらさらなかったから、この結果に俺の将来全てが掛かっていると言っても過言じゃなかった。

もし神様が本当にいるのなら俺の努力を理解してくれるだろう。早苗のもとへ毎日行き、早苗の病気を治したくて医学部を目指して毎日深夜まで勉強して、朝は家族の誰よりも早く起きて、新聞配達をして家計を助けていた。

早苗の病気を知ってから約半年間そんな生活をしていた。まさに人が変わる勢いで俺は努力し続けた。

でも不安は拭いきれない。最後の模試での結果はあまり良いとは言えず、俺は志望校C判定だったのだ。それでもまだ一般的には珍しかった言語聴覚士という職業になるためにはその大学が一番理想的で、それ以外の大学は県外にあり毎日早苗に会うことが困難になる。だから俺はこの大学一本でいくしかなかったのだ。

ドキドキしながら封筒に手を掛けると、小刻みに自分の手が震えているのがわかった。こんな時精神力の強い母が物凄く羨ましくなるあの図々しさはなぜ俺に遺伝しなかったのかと。

それでも封筒を開けて中に入っているものを出すと、色々な種類の書類が沢山出てきた。なんとか検定とかそんなのも受けたことのない俺はただただ全ての書類に目を通した。

納期期間・振込・同意書。そんなことが書かれたプリントの後に合格・不合格の核心の書かれたプリントを発見し、見た瞬間俺は家を飛び出していた。

走り出した俺の頭の中ではすでに向かう場所は決まっていた。もうそれ以外頭にはなかった。

この喜びを学校でも親でもなく、胡さんでもなくて、俺が一番早苗に伝えたいんだと頭が理解した時、既に身体は走り出していた。

この喜びをどうやって彼女に伝えよう？彼女の家に向かう途中早苗の父に鉢合わせた。

「どうしたんだいこんな時間に？」早苗の父は俺を見るなり驚いたように言った。それもそのはずだろう、普通の高校生なら学校に行っている時間だったから。

たいした言い訳も見つからずにいる俺に早苗の父は、全てを見透かしたように笑い「まあ早苗に会ってやってくれ」と言っただけ俺の肩をポンポンと叩き歩き始めた。

早苗の部屋のドアを勢いよく開けると、早苗はいつものようにベッドに座って簡単な本を読んで勉強していた。そして突然入ってきた俺に、少し驚きながらも笑顔で「おはよう」と伝えた。

俺は少し息切れしながら興奮気味に「おはよう」と言い、早苗に一番伝えたかったことを伝える。

「大学受かったんだ」俺の言葉に早苗は笑顔浮かべ、拍手して祝ってくれた。この前大学受けるという話をしていたからか、俺の表情で読み取ったのだと思っている俺に彼女は言う

「おめ・・・で・・・とう」言い終わってから彼女は少し顔を赤らめて屈託のない笑顔を浮かべた。顔を赤くするのは新しい言葉を初めて人前で使うときの彼女の癖だった。

「練習したの？」と聞くと彼女は小さく頷いた。「ざんねんだった

ねとかも？」と聞くと彼女は俺がなんと云ってるかわからなそうな顔を浮かべた。

祐史が大学落ちるわけじゃないなんて誇るような表情を浮かべる彼女を俺は強く抱き寄せた。

二月の中旬ごろ暇になっていた俺は久々に早苗のリハビリに付き添いで病院を訪れた。

そのリハビリセッションは複合施設で様々な障害を持った方が訪れていることに半年経って俺はやっと気付いた。医大に受かったということで少し勉強も始めていたので、そこも少し興味深かったすると一人の先生が俺に近づいてきて「早苗ちゃん頑張ってるね。」

「どんだんよくなってる」と楽しそうに言った。一度は見捨てたような奴らが何言ってるんだと思いつながら、良くなって当然だとも思っていた。彼女の努力を一番近くで見ていたから。

さつき神様がいたら俺の努力がとか言ってたけど、彼女の努力に比べればおまま事ようだった。彼女にとっては話すことも、書くことも、音楽を聞くことすらリハビリなのだ。

彼女はもともと学校でも頭がよくって学年の上位に入っていたし、部活も熱心にやっていたこともあり、もともと努力家だったことが常に努力を求められるこの病気では不幸中の幸いだった。

早苗がリハビリをしている間少し担当医師と話していた。ほとんどのことは聞き流す程度だったが、一個良いなと思えることを言っていた。

それは早苗を外に連れ出してみてもどうかということ。失語症は心理的に孤独感に陥りやすいことから、社会に慣れさせたほうがいいということだった。確かに早苗はほとんど家において、話すのも俺か母か父だけだったから。

リハビリが終わって戻ってきた早苗は少し表情が晴れやかだった。

なんとなく調子でも良いのだろう。そういうことが彼女はすぐに表情に出るのだ。
でも早苗がそんな表情を浮かべてくれるだけで俺は素直に嬉しかった。

押し付けがましいかもしれない。でもまたあなたと太陽の下、手を繋いで歩ける日を夢見てるんだ。

LOVE

クラスの大半の進路が決まり始めた二月下旬。そろそろ卒業も近づき、ちらほらと卒業旅行の話などを耳にするようになった。

もちろんうちのグループでも卒業の話は持ち上がったが、俺は正直気が乗らなかった。早苗のこともあるけれど、何より胡さんに行くということに少し抵抗があった。

あれからまだ俺たちは互いに気まずさに包まれていたからだ。

俺から突然謝るのもよくわからないし、今さら言い訳なんてする必要があるのだろうかとも思う。気まずさを解く方法もわからないまま時間だけが無情に過ぎていった。

それでも俺と早苗の関係は日増しに近づき、順調というほかないくらいだった。

医師に言われた早苗に外出をさせるという話を早苗の両親に持ちかけてみると、二人とも少し戸惑ったような表情を浮かべた。

確かに急に外出させることが両親にとって心配なことは重々承知していた。俺が親だったとしても迷うところだろう。

それでも最終的には「祐史君がずっと一緒にいてくれるなら安心だから」と俺が早苗から目を離さないことを条件に認めてくれた。

「ありがとうございます」俺は早苗の両親の暖かさに心からお礼を言い深々と頭を下げた。まるで結婚を認められたかのような俺の態度に、早苗の両親は顔を見合わせて恥ずかしそうに苦笑いした。

早苗をどこに連れて行こうか。そんなことを考えていた時久々に幼馴染の三人だけで話をした。

「おい祐史！何考え事なんて似合いもしないことしてんだ」そう悪戯に笑いながら俺に声を掛けてきた照雄は野球部だった時よりす

っ かり髪も伸びて雰囲気も少し変わっていた。

「うるせえ」そう言った瞬間に二人とも笑顔になっていた。このやりとりいつぶりだろうか？ たった半年前の出来事が俺にとっては遠い昔の出来事のように懐かしく思えた。

照雄の傍らにいる君恵は空気の読めない照雄を肘でつつき「祐史卒業旅行何処行きたいか決めてくれた？」と言った。

昔から君恵は人の感情の変化に気付くことができる人間だった。でも今は君恵のその優しさよりも、何も考えずに突っ込んできてくれた照雄の図々しさの方が俺には嬉しかった。

「悪い。まだ決めてない」そう言う素っ気無く「そっか」と君恵は言った。深くは追求しては来ない方が今の俺にとっては逆に辛い。胡さんと行きたくないんだ。なんて自分から到底言える気がしなかったから。

一緒にいるのにしばらく黙り込んでそれぞれの時間を過ごしていた。それに耐え切れなくなったのは照雄だった。

「なんかよくわかんねえけど、あれだ。連れてくればいいよ」急に何を言い出すのかと思いきょトンとする俺に照雄は続ける

「なんていうだっけあの子？・・・そう戸田さんも」照雄の言葉に君恵はまた「何言い出すの」という表情で睨んだが、俺は照雄に感謝した。

「それだったら行きたいところあるんだけど」思いもよらない言葉に照雄と君恵は黙ってこっちを見つめる。

「ほらみろ」って顔で君恵を見返して照雄は「どこに？」と少しワクワクしてるように言う。

俺は躊躇うこともなく即答した「スペイン」と

今のように手頃な値段で海外旅行ができる時代じゃなかったあの時代に、高校生が海外に行くことは決して容易ではなかった。それで

も私はあの頃どうしてもスペインに行きたかった。

「なんでスペイン？」そう聞く照雄は不思議そうな表情を浮かべた。現実的に考えればそんな表情をされてもおかしくない。

「ちよつといろいろあつてね・・・」そういった瞬間に「隠し事なんてしないで！」と怒鳴ったのは照雄ではなく君恵だった。びつくりして黙る俺に君恵は続けながら涙ぐんだ。

「なんでも話してよ。私たちをもっと頼ってよ。言ってくれなかったらわかってあげられることだってわかってあげられないじゃない！」俺はそう言つて、下を向いて小刻みに肩を揺らしながら泣く君恵をただ見つめることしかできなかった。

すると照雄がいつになく真剣な顔をして君恵の代弁をするかのように言う。

「だったら行こうぜスペインでもどこでも」手で君恵の頭を撫でながら、目は的確に俺を捕らえながら言つた。

「でも・・・」と言いかけた俺の言葉を照雄は遮り「でももだってもないだろ！なんで行きたいのかはわかんないけど、それでお前の抱えてる悩みは解決すんだろ？だったら行こうぜ」そう言つて照雄はまた悪戯に微笑んだ。

「君恵はホントに祐史のこと心配してたんだよ。最近ホント元気ないつて。どうしたら前みたいに笑い合えるのかって」その照雄の言葉が聞こえてか、君恵はまた肩を揺らしながら泣いた。

そんな風に考えていてくれたんだと初めて知った俺は、今までの自分の愚かさにも初めて気付かされた。今まで一緒に馬鹿やって、一緒に笑ったり、泣いたり、何でも言い合っていたのに、いつの間にか変な気を使うようになっていた。それが三人の間に壁を作るとも知らずに。

「悪かったな迷惑掛けて」俺がそう言つと照雄は笑いながら「お前は馬鹿なくらいが丁度良いんだよ」と言つた。

「うるせえ」と言い返す時には、俺たちはまた自然に笑顔になっていた。

スペインに早苗と一緒にいきたいということを早苗の両親に告げると、快く了承してくれた。何を言わなくても早苗の両親には全てを見透かされているように思えた。

逆に言った俺が「良いんですか？」と聞き返すと「急は急だけど、なんか祐史君らしい考えだったからね」と笑顔で言われたから。

俺がスペインに行きたい理由は簡単だった。ただ早苗と同じ環境を味わっておきたいと思ったからだ。

失語症は「日本人がフランスのパリに一人で旅行したような状態」と言われている。だから俺も、自分がどこにいるかもわからない、何を言われているかもわからない場所に行ってみたかった。

それと生きる創造物で未だ建設途中の「サグラダ・ファミリア」を見たことからだった。何度か雑誌で見て感銘を受けたのだ。

設計者のガウディは既に亡くなっていて、設計図も残されていないらしい。それでもガウディの弟子たちによって建設は続けられている。

それは弟子たちがガウディの意志を守りたかったからなのだろう。完成は2026年前後と言われている、きっと完成した姿は俺は見ることができないと思う。でも未完のサグラダ・ファミリアになんとか俺は浪漫を感じていた。

そして早苗に言葉じゃ言い表せない何かをそこから感じ取ってもらいたかったし、言葉にできない感情を共有できたらと考えていた。だから俺はスペインに行きたかった。というより行かなきゃいけないという使命感にも似たものを感じていたのだ。

そこに言葉なんて必要ない。私たちは心で繋がっているのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1838c/>

今一番逢いたい君へ

2010年10月9日18時26分発行